

板がはめ込んである。不思議な墓である。由幾はこの父を深く敬愛していた。だから私は、「お祖父様のような立派な化学者になりなさい」と言われながら育った。小中学生のころの話である。

由幾の父への挽歌は雑誌「鶯」の昭和十六年三月号に載っている。同誌はその前に佐佐木治綱が創刊した月刊誌である。

強き人に在しし父はつよきゆ糸に死に給ふことなしと思ひぬし

父と共にかるたとりつるこの部屋に今夜ふけつつ沁み入るばかり花白し御極守りて香たきまつる

あふれく涙のごはず御極を送るに間ありて御側に坐する

母やみて幼なはらからひそみ居れば西遊記を夜夜きかせ給ひし

糸ひませば葡萄酒の美酒と吟じつつ思ひなげなる様にあたまひし

六首目に出てくる「葡萄酒の美酒」は、王翰の詩「涼州詞」の冒頭部である。

葡萄酒の美酒 夜光の杯

飲まんと欲すれば 琵琶馬上に催す

酔うて沙場に臥す 君笑うこと莫かれ

古来征戦 幾人か回る

酔うとよく漢詩を吟じたらしい。彼は金沢生まれ。金沢第四高等学校から東大理学部に行っている。漢詩を吟じたりするのは旧制高校の空気だったと思われる。

酒好きだった。追悼文には軒並み酒の話が出てくる。私の酒好きは、この祖父の影響らしい。

信綱も追悼文を寄せている。その一節にこうある。「通夜の晩に、片隅に坐つて、静かにありし世の博士を偲んでをると、友人の一人であらう、夫人の前にウイスキーの瓶をおかれて、いつか博士がこられた時、この瓶をあげたに、半分は次の時にといつて帰られたが、このやうなことになる。自分はその厚い友情を感じ、亡き博士の微笑の面を思ひうかべた」。

昨年、最後まで残っていた由幾の一番下の妹が死去した。姉妹兄弟が多いと、さまざまな人生を送った者がいた。由幾が親しかった者もいれば、疎遠だった者もいた。

由幾は早く死んだ弟・鈴木健治ととりわけ仲がよかった。二人いた弟の上の方である。母の遺品で、この弟の海軍の軍服姿の

写真だけは特別な場所にしまつてあった。

駆逐艦に乗っていて、北海道沖で戦死したと聞いていた。この叔父が戦死したとき、町をあげての大きかりな葬儀を断片的におぼえている。葬儀で海軍元帥という人をはじめて見た。由幾は、弟への哀悼の思いを書き、能楽師・喜多実作曲してもらい、当日、同氏に謡ってもらった。

母の唯一の趣味は能楽だった。子供のころから観世流の謡曲を習っており、戦後は能楽書林という出版社にアルバイトで通った。昭和四十年頃から一噌流の能管（能の横笛）を習ったりもした。だから謡曲で哀悼するのはよく分かるが、なぜ喜多実だったのかは分からない。信綱が口をきいたのかもかもしれない。

思い立ってネットで調べてみた。鈴木健治海軍大尉が乗っていた駆逐艦は白雲。砲術長だった。一九四四年三月十六日深夜、船団護衛中に釧路沖合で米潜水艦の雷撃により撃沈された。戦死して少佐となった。

また、葬儀に来た海軍元帥は永野修身。連合艦隊司令長官、海軍大臣などを歴任、A級戦犯の容疑で東京裁判中に巣鴨プリズンにて病死。千葉工業大学の創設者、とあった。